

氏名	たま だ りゅうたろう 玉 田 龍 太 朗
学位の種類	博 士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 237 号
学位授与の日付	平 成 16 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 人 間 ・ 環 境 学 専 攻
学位論文題目	フイヒテのイエーナ期哲学の研究

論文調査委員 (主査) 教授 安井邦夫 教授 富田恭彦 助教授 佐藤義之

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ドイツ観念論の思想家J.G.フイヒテ(1762~1814)の哲学をとりあげ、とくに彼の前期イエーナ時代の思想が総体としてどのような特質をもつかという点を明らかにしたものである。通常、フイヒテの思想は1800年を境にして前期の「自我」の哲学から後期の「絶対者」の哲学へと移行するとされるが、前期のイエーナ時代の内部においても、すでにくつかの発展段階がみとめられ、その思想内容も決して一様のものではない。申請者は、こうしたイエーナ期におけるフイヒテの思想の発展を全体として総合的にとらえることを目指し、そのために、先ずイエーナ前期に属する『知識学概念について』(1794年)、『全知識学の基礎』(1794/95年)といったテキスト、さらにイエーナ後期に属する『自然法の基礎』(1796/97年)、『道徳論の体系』(1798年)、『知識学への第一序論』(1797年)、『知識学への第二序論』(1797年)、『知識学の新叙述の試み』(1797年)、『新たな方法による知識学』(1796~1799年)といったテキストというように、この時期に属する文献の殆ど全てをとりあげ、それらを詳細に検討している。申請者は、このように、フイヒテ哲学の基礎理論である「知識学」に関連するテキストのみではなく、自然法論や道徳論といった応用理論の文献にも目を向けており、それによって、広範な拡がりとも多彩な内容をもつイエーナ期のフイヒテの思想の全体像を示すことを意図している。また申請者は、こうした多様なテキストの読解をととしてフイヒテの前期思想の核心にあるものとして「自我の非制限性」ないしは「人間精神の有限性」という規定をとりだしており、それによってフイヒテ解釈のための一つの基本的な視座を獲得するに至っている。

論文の全体は六つの章から構成されており、各章はそれぞれ独自のテーマについて論じているが、それらは上記の観点から内的に関連づけられている。

第一章「フイヒテ『自然法論』における身体論の特性」では著書『自然法の基礎』がとりあげられ、そこに現われるフイヒテの身体論が考察されている。フイヒテの身体論は、自己意識の理論、他者認識の理論、個性の理論といった諸理論を背景にして成立する独特なものであるが、ここではそれがさらに理性的個体(人格)、物質的個体、実働的個体(身体)といった諸概念との関連で綿密に考察されている。また、とくに他者論とのかかわりが重視され、他者経験のメディウムとしての身体、「顔」、形成適合性といったフイヒテに固有の諸概念が解明されている。

第二章「初期フイヒテの経験へのアプローチ」では主として『全知識学の基礎』『知識学への第一序論』、『第二序論』といったテキストがとりあげられ、フイヒテにおける「経験」の概念がどのような特質をもつかが解明される。知識学は「必然性の感情に伴われた表象の体系」である経験の根拠を問うものであるが、その際、根拠づけの原理として、自己のうちに「在ること」と「見ること」との、「実的なもの」と「観念的なもの」との二重の系列を含むという自我の「対自性」の構造が提示される。申請者はこの対自性の構造をめぐる諸問題を『基礎』や『第一序論』との関連で綿密に論じている。

第三章「フイヒテ初期知識学における『感情』の問題」では主に『知識学概念について』と『全知識学の基礎』という二つのテキストがとりあげられ、フイヒテにおける「感情」(Gefühl)の概念がカント以来の「物自体」の問題との関連で考察される。物自体が同時に「可想体」の意味をもつというカントにおける物自体の矛盾的な二重性がフイヒテにあっても

「非我=物自体=可想体」というかたちで残存していることが解明され、さらに、そうした矛盾的な二重性がまた逆にフィヒテにおける「人間精神の有限性」という基本規定をもたらすものであるということが指摘される。

第四章「フィヒテ道徳論における衝動の問題」では応用理論の大著『道徳論の体系』がとりあげられ、基礎理論の『全知識学の基礎』では抽象的なかたちで現われる「衝動」の概念が道徳論の脈絡のなかで具体的に考察される。フィヒテの衝動の概念はヘーゲルが『差異論文』（1801年）のなかで厳しく批判したものであるが、この概念はむしろ自我の有限性という立場に立つフィヒテのイェーナ期思想の特色を浮き彫りにするものである。

第五章「『新たな方法による知識学』における衝動の問題」ではイェーナ時代の後期の知識学がとりあげられ、前章で扱われた衝動の問題がさらに広い視野から究明される。ここでは、衝動の概念は「意志」や「身体」の概念との関連で考察され、それら三者の相互関係から有限的な自我の「自由」がどのような構造をもつかが解明される。

第六章「フィヒテ道徳論における根本悪の問題」では、シェリングが『自由論』（1809年）でカントの宗教論における根本悪の思想を評価しながら、フィヒテの道徳論におけるそれについては批判的に言及していることをふまえ、カントの悪の概念とフィヒテのそれとが詳細に究明される。フィヒテにおける根本悪の問題は従来ほとんど考察されていないテーマであるが、本章では、この問題が、フィヒテのいう「反省」の概念に着目することによって、独自の観点から解明されている。

以上のように、本論文は「人間精神の有限性」という規定を導きの糸としながらイェーナ期のフィヒテの思想を知識学と応用理論の両面にわたって広く総合的に解明したものであり、こうした考察をとおして、この時期の思想を貫く全体的な本質を明らかにしたものとと言える。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文はドイツ観念論の代表的な思想家の一人であるJ.G.フィヒテの哲学を対象としたものであるが、フィヒテの研究は、従来から、同じドイツ観念論のなかでもヘーゲルやシェリングの研究に比して若干の遅れを見せていると言える。しかし、一方で、フィヒテ生誕二百年の1962年には研究の基礎となる新しい全集の刊行が始まり（すでに三十余巻が公刊されている）、その後も国際フィヒテ学会やその他の関連プロジェクトが発足するというように、徐々にフィヒテ・ルネッサンスとでも言うべき潮流が生じて来ている。本論文はこうした動向を背景としながら、我が国の従来のフィヒテ研究を踏まえつつ、それをさらに一歩前進せしめることを意図したものとと言える。

まず本論文の全体的な特色についてであるが、それは概ね次のような諸点に見出される。

第一に、フィヒテの思想は1800年を境にして前期の「自我」の哲学から後期の「絶対者」の哲学へと変貌するが、我が国の従来の研究では、前期のイェーナ時代自体の内部に見られる思想の変化については余り触れられないのが通例である。それに対して、申請者はイェーナ期に属するテキストを全体的に検討することにより、この時期の思想が必ずしも一様な内容をもつものではなく、すでにそのうちに幾つかの発展段階を含むものであることを示しており、これは本論文における重要な収穫の一つであると考えられる。

第二に、従来のフィヒテ研究ではフィヒテ哲学の基礎理論である「知識学」を対象とするものが主流を占めており、イェーナ期の研究でも、『全知識学の基礎』に代表される知識学の系列に属する著作の研究が本流となっている。それに対して、申請者は、基礎理論のみではなく『自然法の基礎』や『道徳論の体系』といった応用理論の著作にも目を向け、そこに埋められている身体論や他者論といった重要な思想を発掘してきており、これはフィヒテ研究に新しい領野を切り開くものとして高く評価できる。

第三に、申請者はフィヒテのイェーナ時代の思想を総合的にとらえるに当たって、解釈の統一的な視点として「自我の被制限性」ないしは「人間精神の有限性」という概念を提示しているが、これは重要な意味をもつと想われる。フィヒテは、非-我が自我への関係において従属性とともに自立性をもつという構造を「有限な精神がそこから脱出しえない根源的な矛盾の構造」としてとらえているが、申請者はこの規定を原理にしてイェーナ時代の思想の全体に従来にない新しい光を当てていると言うことができる。

第四に、フィヒテの哲学とドイツ観念論の他の思想との連関であるが、フィヒテのイェーナ期の思想を十全なかたちで解明するためには、一方で、それがドイツ観念論の流れのなかでどのような位置を占めているかという点を明らかにしなければ

ばならない。申請者はこうした見地から、カント、ヤコービ、シェリング、ヘーゲル等の思想にも独自の考察を加えているが、本論文は、このように、ドイツ観念論の通史という面でも新しい知見をもたらしていると言うことができる。

以上が本論文の全体的な特色であるが、次に各章ごとに注目すべき点を挙げてみる。

第一章は「身体論」や「他者論」というフィヒテ研究の内部ではまだ未開拓の領域に属するテーマをとりあげたものであり、自我-非我という抽象的な連関が「身体」や「他者」という概念においてどのように具体的に肉付けされていくかを解明した重要な内容を含んでいる。とくに他者論は後のヘーゲルの「承認論」にもつながる重要な意味をもつものであり、こうしたテーマに着目した申請者の問題意識は高く評価されなければならない。

第二章はフィヒテにおける「経験」概念がどのような内実をもつかという認識論的な問題をとりあげ、それを「在ることと見ることとの直接的統一」という自我の存在の「対自性」の構造との関連で考察したものである。フィヒテの場合、認識論的な問題は必然的に自我の存在の究明という存在論的な問題と結びつくが、申請者はこうした二つの問題系の内的な繋がりを独自の観点から解明していると言える。

第三章は知識学のうちに現われる「感情」という独特の概念に着目し、それとの関連で自我における根源的な二重性の構造という重要なテーマを考察したものである。「物自体＝可想体」というカント以来の物自体の二重性が「実在・観念論」というフィヒテの基本的な立場のうちにも残存しており、そうした二重性がまた「人間精神の有限性」というフィヒテの根源的な見地にも繋がるものであることを申請者独自の考察をとおして示している。

第四章と第五章はそれぞれ『道徳論の体系』と『新たな方法による知識学』によりながらフィヒテにおける「衝動」の概念を考察したものであり、前者では衝動と自我の二重性との関連が、後者では衝動、意志、身体という三者の相互関係が、それぞれ解明されている。いずれの章も衝動の概念を媒介にして従来見過ごされてきた新しい問題を掘り起こしたものであり、それに関して斬新な考察を展開したものであると言える。

第六章はフィヒテの『道徳論』に現われる「根源悪」の問題をカントの『宗教論』やシェリングの『自由論』におけるそれとの関連で考察したものである。フィヒテにおける根源悪のテーマも従来殆ど見過ごされてきたものであるが、申請者は、この問題を「反省の構造」や「対自性」といたフィヒテにおける存在論的な基礎概念との関連で解明している。そして、こうした応用論的なテーマをとりあげる場合でも、それを存在論的な基礎理論の次元にまで遡って究明するという態度は、本論文の全体に見られる申請者の一貫した基本姿勢と言える。

以上のように、本論文は綿密で周到な文献研究と斬新で創意に富んだ問題意識の上に成立しており、その成果はフィヒテ研究に新しい寄与を付け加えるものと考えられる。なお、本論文各章の前提となっている各論文はすでに学会誌、紀要等に採択・発表され、いずれも多く注目と高い評価を得ている。また、本論文はその内容からみて人間・環境学研究科（人間・環境学専攻、人間形成論講座）の基本理念に合致するものと判定しうる。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成16年1月19日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。